

各種連盟

北海道社会人サッカー連盟／北海道学生サッカー連盟
北海道自治体職員サッカー連盟／北海道自衛隊サッカー連盟
北海道専門学校サッカー連盟／北海道クラブユースサッカー連盟
（一社）北海道フットサル連盟／北海道シニアサッカー連盟
北海道チャレンジドサッカー連盟／北海道ビーチサッカー連盟

【北海道社会人サッカー連盟】

北海道社会人サッカー連盟の現状と今後の展望



北海道社会人サッカー連盟 理事長 八島 隆志

北海道社会人サッカー連盟は1977年に創立し、2023年度で47年目を迎えます。

会長・副会長・理事長に加え、札幌・千歳・函館・室蘭・苫小牧・旭川・十勝・釧路・オホーツクの各地区社会人連盟、小樽・空知・北空知・宗谷・根室の各地区協会1種委員会または社会人事業委員会より理事を選出し、会長推薦理事を加え総勢28名により理事会を構成し、各地区社会人連盟及び各地区協会と連携して、北海道内社会人関連事業の運営及び北海道サッカーリーグ、札幌、道央・道北、道南、道東の各ブロックリーグ、全道ミドル選手権大会、全国社会人選手権及び全国クラブチーム選手権の北海道予選大会、全道社会人選抜大会、ブロックリーグ決勝大会の各種大会運営を行っております。また、(一財)全国社会人サッカー連盟へ2名の理事を選出することにより、全国での社会人関連事業の運営及び全国社会人選手権大会、全国クラブチーム選手権大会、全国地域サッカーチャンピオンズリーグの大会運営にも関与しております。

登録チーム数は、1977年の札幌地区20チームの登録から年々増加し2005年度には597チームとなりましたが、それ以降は毎年20チーム程度の減少が続いておりました。

さらに、2020年度はコロナ禍の影響により前年度から約80チームの減少があり、その後も回復は出来ず、2022年度の登録は237チームまで減少しています。登録各チームに対して有効な還元を行えるよう常に検討しながら、登録チーム数の減少を食い止めていくことが重要な課題となっております。

全国9地域において、アマチュアサッカーの最高峰である日本フットボールリーグ(JFL)に、唯一北海道のみがチームを輩出していない地域となっております。しかし、北海道にも将来的なJリーグ入りを明確に表明するチームも現れ、JFLへの昇格を懸けた全国地域サッカーチャンピオンズリーグでの多地域代表チームとの対等な戦いや、全国社会人選手権における全国準優勝など、ここ数年、北海道内の競技レベルは格段に向上しています。

2023年度は全国クラブチーム選手権を十勝地区で開催いたします。競技レベルの向上に合わせ、当連盟の運営能力の更なる向上を目指して努力していく所存です。

【北海道学生サッカー連盟】

大学サッカーのこの2年



北海道学生サッカー連盟 会長 岸 豊

北海道学生サッカー連盟のこの2年間は、他団体同様コロナに振り回された2年間でした。特に2021年は1部リーグで5試合、2部リーグでも3試合コロナによる中止試合がでるなど、全日程をこなせない状況で順位を決定せざるを得ず、そのため昇格のみ行い、降格は実施しない変則的なレギュレーションとなりました。2022年度はこのため1部9チーム、2部8チーム、3部11チームによるリーグ戦となりました。1部リーグについていえば降格を行わないことにより、チームとしての力の差が顕著に表れ、得点差の多い試合が増えることとなりました。これもコロナの影響の一部ではありますが次年度以降のコロナ後に向けた課題の一つとなりました。1部リーグの結果について目を向けますと、21年度は優勝札幌大、2位東海大となり両チームがインカレに出場しました。長く2強時代の一つを担った北海道教育大岩見沢校は3位に終わり悔し涙を流す結果となりました。翌22年度は、前年の雪辱を果たした岩教大が優勝し1校のみのインカレ出場となりました。そしてこの年の岩教大はインカレでも初戦、2回戦突破する活躍を見せました。まさに、前年の悔しさをばねにして好成績につなげ

た感がありました。この好結果を是非道内に還元するとともに、次年度以降の一層の活躍を期待したいところです。さて、この2年間には学生サッカー連盟の組織にも大きな変動がありました。20年以上にわたり理事長を務めてきた越山賢一氏がHKFAの会長職に就くため名誉会長となり、同時に2期4年会長を務めた藤山和夫氏も退任することとなりました。会長、副会長、理事長、副理事長の4役役員が全て交代するという組織体制の一大変革を迎える事態となりました。コロナ対応と同時に、長年の学生サッカー連盟の伝統と歴史を引き継ぎ、どう今後の活性化につなげていくか、後を引き継いだ者にとっては大変な課題となったところです。幸いにも加盟大学や役員の理解と協力、そしてHKFAを始め各地区協会関係者の皆様のご支援、ご協力により、何とかスムーズな新体制への移行を果たせたのではないかと考えているところであります。今後さらに、大学サッカーが北海道のアマチュアサッカーを牽引するという気概を引き継いで、より一層の大学サッカーの振興に努めていきたいと考えております。

【北海道自治体職員サッカー連盟】

今後の活動展望



北海道自治体職員サッカー連盟 理事長 八木 康年

当連盟は設立から 35 年を迎えましたが、令和 2 年度から 4 年度までの 3 年間、コロナ禍により、全ての事業を中止とする対応をとってきました。

連盟の活動は、国内情勢が安定し、道内においては大きな災害や住民生活に支障が出る事案が多く発生していないことが、活動実施の前提となります。

また、私たち自治体職員は、それぞれの地域で健康的に働き「地元を守る」ことも重要な職務であることから、サッカーやフットサルを通じて、率先して心と体を鍛えることを続けてまいります。

令和 5 年度からは以下の思いを持って連盟活動を再開したいと考えております。

- ①サッカーやフットサルを通じて、それぞれの地域で健康的に働き続けるため、率先して心と体を鍛え、地元を大切にすることに努めます。
- ②地域で活躍する人を育むため、若者が地元で活躍できる場を作ります。
- ③一生涯、スポーツを続けられる環境を未来に残します。
- ④地域と自分の健康のため、サッカーやフットサルを通じて、余暇活動であっても全力で楽しみます。

【北海道自衛隊サッカー連盟】

50周年メモリアル大会



北海道自衛隊サッカー連盟 理事長 小澤 義則

2022年度(令和4年)全道自衛隊サッカー大会兼第57回全国自衛隊サッカー大会北海道予選が8月6日(土)、千歳市の青葉公園サッカー場で開催されました。前年度はコロナ感染拡大する中、同大会を中止せざるおえない状況に陥り、大会始まって以来の中止となりました。

今年はコロナの状況下ではありましたが、各部隊・各チームの熱意が通じ、無事に大会を迎えることができ、参加チームは3チームと少し寂しい感じがしましたが、昨年できなかった連盟の50周年記念大会として実施することができたのは大変良かったと思います。

幸い天気にも恵まれ、風があり涼しいくらいでしたが、試合は総当たりのリーグ戦で行い、25度の優勝をしている千歳基地サッカー一部が底力を見せ、他チームを寄せ付けず、貫

禄の26回目優勝を成し遂げました。

また、記念大会にあたり、連盟旗のお披露目、プログラムの表紙は連盟旗をプリントし、試合球には50周年記念の刻印をあしらい、試合開始のセレモニーとして中村会長によるキックインで試合をスタートしました。

もう一つ、僭越ながら理事長賞として記念のJFAオリジナルマスクを当初、得点王の選手に計画していましたが、該当者がいないため、各優秀選手にプレゼントしました。

決して大々的にはできませんでしたが節目の50周年メモリアル的な物が多少できたかなと思います。この先、未来永劫に連盟が続いて行くなばうれしい限りですし、また、良き伝統が継承されることを期待したいと思います。

※全国大会については諸般の事情により中止となりました。

【北海道専門学校サッカー連盟】

北海道専門学校サッカー連盟の歩みと取り組み



北海道専門学校サッカー連盟 理事長 三谷 直人

北海道専門学校サッカー連盟は、1991年平成3年4月24日に誕生しました。北海道の専門学校進学率が増加する中、就職・資格取得を目指し、日々学業に取り組んでいる学生たちのリフレッシュの場と、「サッカーを通じ、学生の心身の健全な発達、体力の向上及びスポーツの精神の高揚を図り、併せて専門学校の教育の充実、親睦に寄与すること」を目的としてスタートしました。2022年度に福島県J-VILLAGEで開催された第32回全国専門学校サッカー選手権大会では北海道代表として北海道スポーツ専門学校が会場入りし、準決勝に進出しました。北海道代表の力を発揮してくれました。コロナ禍における多くの制限の元3年ぶりに開催された大会での学生たちの笑顔は改めてスポーツ・サッカーの意義を感じた次第です。近年では少子化等の影響により専門学校への進学率も低

下し、選手・チーム数の減少が連盟にとって大きな課題となっております。

新年度における連盟の活動は4月の理事総会を皮切りに、春のリーグ戦。そして「第33回北海道専門学校サッカー選手権大会」を中心に運営していきます。そして「第33回全国専門学校サッカー選手権大会」(文部科学大臣杯全国専門学校総合体育大会)は大阪府堺市 J-GREEN での開催が決定しています。北海道代表チームが悲願の全国制覇を狙えるよう学生たちが切磋琢磨できる環境を準備していきたいと思えます。

最後になりますが、多くの学生が専門学校卒業後、社会に出ます。本連盟出身選手がご覧の皆様のご近所で働いているかもしれません。是非成長を見守っていただけたらと思えます。

【北海道クラブユースサッカー連盟】

クラブの役割



北海道クラブユースサッカー連盟 理事長 大年 貴之

北海道クラブユースサッカー連盟は、日本サッカー協会、日本クラブユース連盟に所属するU-18・U-15カテゴリーのクラブを取りまとめている連盟です。

クラブユース連盟が発足し、約30年が経ちました。クラブ文化が無かった時代と比べるとサッカー界においてクラブの定着化が見受けられます。その一方で北海道は人口減少や少子高齢化が進んでおり、これによりサッカーを含むスポーツの参加者や人材の確保が課題となっており、クラブチームや学校のサッカー部の運営が困難になっている地域も出てきています。このような現状から部活動の地域移行やクラブの中体連への移行も見られるようになってきました。

また働き方改革により、これまでの日本のスポーツや部活動を支えてきた学校・教員の部活動への関与も変化しており、部活動自体の活動も制限が出てきています。このような環境の変化の中で、今後クラブの役割が重要な時代になってくると感じております。

クラブは、部活動の地域移行においてスポーツ(サッカー)

指導を提供する役割を担い、ライセンス保有の指導者やコーチが部活動の指導に参加し、適切なトレーニングプログラムや技術指導を行い、生徒たちのスポーツ技術や知識の向上を支援することで北海道全体のサッカーレベルを引き上げていけるのではないかと思います。その為には、地域クラブ、学校、関係者間の協力と連携が必要になり、地域サッカー協会、自治体、教育機関との連携や支援が重要と感じております。また、持続可能な運営や資金確保のための努力も求められ、以上の課題への取り組みによって、部活動の地域移行とクラブの発展が両立されていくのではないかと思います。

北海道クラブユースサッカー連盟では、競技力に特化するのではなく、地域との連携と交流を推進し、サッカーコミュニティとの協力や協力関係の構築を促進することによって、育成年代の(ユースサッカー)発展と成長を支える組織であるようにしたいと考えております。

また、北海道のサッカー文化へ全面的に関与し北海道サッカー協会の一翼を担って行きたいと考えております。

【北海道フットサル連盟】

フットサルを盛り上げていきましょう



一般社団法人北海道フットサル連盟 専務理事 荒川 浩幸

ひとつのボールで(One Ball for ALL)、このキャッチコピーは、(一財)日本フットサル連盟(以下「JFF」という。)が策定した理念を一言で表したものです。

2019年にスポーツ庁は、不祥事案の未然防止にとどまらず、スポーツの価値を高めることを目的としてスポーツ団体ガバナンスコードを策定し、中央競技団体と一般スポーツ団体とに分けて発表しました。当連盟もJFFの下部団体として全国9地域連盟と共にガバナンス整備の目的を知り、理解を深め取り組む準備を進めています。

フットサルを取り巻く全てのステークホルダーがハッピーになることを目標とし、9地域47都道府県が運動し、モデル事業を立ち上げ、情報や地域の課題を共有しながら少しずつですが競技というコンテンツの価値向上の為、様々な施策を検討・実行しています。

当連盟の具体的な取り組みを紹介します。
フットサルをプレーする上で必要な登録制度が変更された2014年以降収益の殆どを交付金に依存していましたが、(公財)北海道サッカー協会のご理解とご協力を受け、2022年度より新たな連盟加盟登録制度を規定し進めています。また、当連盟女子委員会で検討を続けてきた育成年代のリーグ戦、クリニック事業(北海道エスクエラプログラム

ム)が独立行政法人日本スポーツ振興センター(toto)の交付金対象事業に選定されました。この助成の要件として、当連盟が法人団体でありガバナンスコードに基づく自己説明・公表を行うことも上げられます。

チームや選手のニーズも多様化し二極化が進んでくると実感する中でアプローチの仕方、プレーする場所や機会を作り続ける事、そして支える側においても人材確保は急務であり、このスポーツに関わる人々がハッピーになれるよう、組織が一丸となり、もっとフットサルを盛り上げていきたいと強く思うのである。



【北海道シニアサッカー連盟】

北海道シニアサッカー連盟の現状と今後



北海道シニアサッカー連盟 理事長 佐藤 英隆

新型コロナウイルス感染拡大の影響が顕在化した2020年4月に北海道シニアサッカー連盟理事長に就任し、今期で4年目を迎えました。コロナに翻弄された3年間でしたが、常に如何に事業を継続するかを連盟登録チームのみなさんと模索してきた結果、なんとか中止事業を最小限に留め、全国大会に繋がる全道大会や各地区リーグ戦などの主要事業は継続して実施する事ができました。まだまだ油断はできませんが、2023年度は全事業を予定通り実施できる見込みでホッとしているところです。

さて、北海道シニアサッカー連盟は2000年に発足し、2023年度で24年目を迎えますが、まだまだ歴史の浅い組織です。連盟は、会長1名・副会長3名・理事長1名・副理事長3名のほか、13名の常任理事、14名の理事、会計監事2名、2022年から新設したEA(Ecutive Adviser:連盟運営や普及等に関するアドバイザー)2名の総勢39名で理事会を構成し、全国大会につながる真剣勝負の全道シニア0-40/0-50/0-60/0-70サッカー大会、サッカーを楽しむ親睦を深めることが目的の全道シニア8人制オープン大会、北海道シニア8ツアーオープン大会、北海道シニアオ

ーペン大会、全道シニアフットサルオープン大会の企画・運営など、競技志向ごとのプレー環境を創出しています。このほか、道央地区、道南地区、十勝地区、オホーツク地区、釧路地区、根室地区、道北地区で40・50部門のサッカー及びフットサルのリーグを開催しているほか、60/70以上の部門は女子とも連携し、主に道央地区で夏と冬にリーグを開催しています。

登録状況は、2000年のシニア連盟発足時に11チーム・340名でスタートしたのち、年々増加の一途をたどり、2023年度には128チーム・2600名程度になる見込みで、今後も増加することが予想されます。

今後については、サッカーが生涯スポーツと言われて久しく、シニア種の活動領域がより一層広がることが予想されるため、シニア部門のサッカー環境を充実させ持続可能な組織とする必要があると考えています。そのため、以下の項目などを当面の課題と考え、各課題に対し少人数制のワーキンググループによる勉強会を実施しているところです。

- ・10年後のシニア種のあり方
- ・シニアカテゴリーの普及(ミドル年代からの継続者のスムーズな移行、競技を一時中断した再開者や初心者が入りやすい環境及びニーズにあったサッカーをできる環境の創出)、
- ・女子部門との連携
- ・審判スキルの向上及び資格保持者の増強、
- ・道外地域との交流
- ・連盟予算等会計関連

【北海道チャレンジドサッカー連盟】

チャレンジドサッカーの取組



北海道チャレンジドサッカー連盟 会長 佐橋 正智

主に知的障がいのあるジュニア・成人を対象とした連盟です。この2年間はコロナ禍の中で十分な活動を展開することができませんでしたが、各大会ではジュニア・高校生・社会人とクラス分けし、それぞれに日頃の練習成果を発揮する「フリークラス」とボールに親しみサッカーを楽しむ「フレンドリークラス」に分けて運営し、障がいの程度や各自の興味のあり方等に配慮しています。

<基本的活動>

大会関係では、11人制・8人制大会、高等養護学校大会・フットサル大会があり、交流関係でウエルビーイングフットサルフェスティバル、札幌と旭川でサッカーフェスティバルを開催し、普及も図っています。他にも指導者講習会等を企画しています。

<2021年度の活動>

コロナ禍による制限が強まる中、すべての活動において実施することができませんでした。障がいに伴う合併症や持病を抱える人も多く、各選手が所属する特別支援学校や福祉事業所等でも感染対策が強化される中、中止せざるを得ないという立場に立ちました。

<2022年度の活動>

コロナ対策の可視化が進む中、事業の再開方法を主に検討しました。6月12日には第21回11人制大会を栗山町で、7月10日には第14回北海道高等養護学校大会を新篠津村で開催しました。各チームに感染対策者を1名置き感染対策の徹底を図ることや、当日の消毒、日程の変更等できるかぎりの感染対策を行い、久しぶりにサッカーを楽しむことができました。その後感染者数の急激な上昇傾向に伴い、9月予定の8人制大会は中止としましたが、12月18日のウエルビーイングフットサルフェスティバルは厚別区体育館で、2023年1月21日には第22回フットサル大会をつどーむで開催しました。どちらも、クラスごとに実施時間を変えるなど屋内での密に配慮しています。8月20日に旭川でサッカーフェスティバル、12月には南区体育館でフットサル指導者講習会も実施しました。

<今後の課題や展望>

コロナ禍の中で、サッカーから離れてしまう傾向が顕著に浮かび上がりました。ジュニアチームの休止、特別支援学校のサッカー部員の減少などに対し、今一度普及を図りサッカーの魅力を広く伝えることが、ここ数年の大きな課題となります。

【北海道ビーチサッカー連盟】

未来のアイランド Beach Sports?!



北海道ビーチサッカー連盟 理事長 溝口 昇

道内のビーチサッカー競技等は、2006年から(財)北海道サッカー協会(HFA)が主催者(主管北海道フットサル連盟)となり、厚真町浜厚真海岸や石狩浜海水浴場(あそび一ち石狩)において行われておりました。

日本のビーチサッカー界の動きとしては、ビーチサッカーにおける唯一の統括団体として、(一財)日本ビーチサッカー連盟(JBSF)が2015年4月に設立されました。その後、2017年3月、9地域組織化(北海道を除く8地域が組織化済)を条件に(公財)日本サッカー協会(JFA)の加盟団体となったことから、北海道地域の組織化を強く求められたため、組織体制づくり等進めるとともに、JFA、JBSF及びHFAとの協議を重ね、2018年5月に北海道ビーチサッカー連盟(HBSF)を設立にまで至りました。

連盟設立により、2018年以降、HBSFがビーチサッカー事業を行ってきております。

私たちの活動の場は、常設のビーチサッカーコートがないため、遠隔地であるイタンキ浜(室蘭市)やあそび一ち石狩(有料施設)を管理している行政機関へ、海岸(海浜地)の使用許可(石狩市有料)を取り使用しています。あそび一ち石狩においては、海水浴期間中使用できないこともあり、海水浴シーズン終了後使用している状況です。ビーチサッカー会場の設営は、コートラインのテープ敷設やゴール、運営本部等テントの設置。さらにはビーチのごみ拾い活動等多くの時間と経費を要して行わなければなりません。

また、ビーチサッカー競技会やビーチサッカーフェスティバル参加者は、主にフットサルやサッカーを行っている選手達です。道内には、ビーチサッカーを主体に活動しているチームや選手がいないため、ビーチサッカーの普及・発展に繋がっていないのが現状です。

この場所に行ったら誰もが、いつでもビーチサッカーに親しみ、自然を享受することができる「アイランド」が私たちの夢です。

「ブルーカーボンが地球を救う?」をテーマに、より良い未来のビーチサッカーのために、あそび一ち石狩に突堤等を構築し、海藻の藻場と砂浜の保全による自然環境の再生とビーチスポーツの場を整備するアイランド構想を作り、行政機関に働きかけを行います。自然環境と親しみながらビーチスポーツができる環境を目指します。